

産婦人科の漢方療法 その2

更年期障害

東京船員保険病院
産婦人科部長
高橋 諄

はじめに

更年期障害の薬物療法として、従来からのエストロゲン製剤、向精神薬、自律神経調整薬、ビタミン剤などに加えて、漢方療法の有効性が報告され、使用頻度も高まっている。エストロゲン剤や向精神薬は血管運動神経症状、精神神経症状を取り除くのに即効性の面からも有効である。しかし西洋医学薬の単独使用では多様な愁訴をカバーしにくいこと、副作用の発現特にエストロゲン製剤が子宮体癌、乳癌のリスクファクターとなること、向精神薬の依存性などを心配して、患者自身がこれらの投与を望まない傾向もある。

更年期障害はその原因が現代医学的に解明されていない症候群であること、心因性要因の占める割合が大きいことから、今後も漢方療法の使用頻度は高まると思われる。

漢方療法の概念

漢方医学で最も基本的な概念は「八綱理論」と「気・血・水」、「五臓」の概念である。これらの病態因子の組合せから、各因子の過不足（偏在）を見出し、全身的な均衡を取り戻すことが漢方療法の基本となる。

- 1) 「八綱」とは、a) 表・裏、b) 寒・熱、c) 虚・実、d) 陰・陽の対峙する4対からなり、特に虚（体力の衰えている状態、消化吸収機能の減弱）か、実（活力ある状態、栄養状態良好）かの判断は漢方薬を決めるうえで重要な指標となる。
- 2) 「気・血・水」の異常には気虚、気鬱、気逆、血虚、瘀血、水滯などがあり、多くは互いに影響しあって、さまざまな症状を呈する。
- 3) 「五臓」とは人体臓器に当てはめた心、肝、脾、肺、腎からなり、以下のような生理機能に相当する。a) 心：高次神経活動、心臓血管系 b) 肝：肝臓、自律神経系、骨格筋運動 c) 脾：消化吸収、体液バランス d) 肺：呼吸、体温調節 e) 腎：成長発育、内分泌系、泌尿生殖器系、造血系。

更年期障害の症状と漢方医学上の病態

更年期障害の症状は、一般に以下のように大別されている。

- a) 血管運動神経症状…のぼせ、ほてり、発汗、冷え、動悸など
- b) 知覚神経症状…しびれ、感覚障害など
- c) 運動器症状…肩こり、腰痛、疲労感など
- d) 精神神経症状…不眠、ゆううつ、頭痛、いらいら感など

漢方医学では、これらの更年期障害の症状を加齢に伴う身体機能の低下、特に「腎・肝・脾」の老化が、「気・血・水」に不調和を来すことによるとしている。この不調和は更年期に限らず、女性特有の思春期、月経、妊娠、産褥といったホルモン変動の大きい時期、精神的ストレスのかかりやすい時期に起こり、広くは「血の道症」としてとらえられてきた。更年期障害に関連の深い「気・血・水」に関する病態を以下に示す。

1) 瘀血

局所的には骨盤内うつ血症候群に相当し、血液粘度の亢進を伴うとされている。全身的な自覚症状としてはのぼせ、手足の冷え又はほてり、便秘、頭痛、めまいなどの不定愁訴があり、他覚所見としては浅黒い皮膚、荒れた皮膚、暗赤色の口唇、舌、腹証として下腹部の抵抗と圧痛を認める。「気虚」や精神的ストレスも原因となる。

2) 気逆

身体末梢から中心部へ、下半身から上半身への「気」の逆流とされ、自覚症状として、手足の冷え、のぼせ、顔面紅潮、いらいら、動悸などを訴える。

3) 気滞

「気」の循環が停滞した状態とされ、停滞した部位により、さまざまな自覚症状を呈する。精神的抑うつ、頭重感、喉にものがつかえた感じ、息苦しい感じ、腹部膨満感などである。訴えは時間によって消長し、部位が移り変わることが多い。

4) 気虚

主に消化器系の機能を司る「脾」の機能低下に伴う「脾気虚」が主体となることが多く、消化吸収不良、顔色不良、疲労感を訴え、脈は力がなく、腹力は軟弱である。

5) 血虚

いわゆる貧血の状態であり、動悸、めまい、疲労感、不眠、目のかすみを訴える。

6) 水滞

「水」が停滞、偏在した状態とされ、「気・血」の異常（気虚、瘀血）、「腎」の異常によって二次的に起こる。浮腫、めまい、耳鳴り、吐き気などの症状のほか、腹部の所見として、胃部振水音がみられる。

更年期障害によく用いられる漢方製剤

漢方療法では、以上にあげた「気・血・水」の異常に対し、瘀血には駆瘀血剤（当帰、芍薬、川芎、牡丹皮、桃仁）が、気虚には補気剤（茯苓、甘草、人参）が、水滞には駆水剤（茯苓、蒼朮、半夏）が用いられる。「気・血・水」の異常と各種生薬の対応を表1に示した。

(表1) 各種漢方上の病態に対応する生薬

漢方上の 病態	生 薬														
	当帰	芍薬	川芎	牡丹皮	桂皮	桃仁	柴胡	茯苓	甘草	人参	蒼朮	黄連	半夏	紫蘇葉	木香
瘀血	○	○	○	○	○	○									
気逆			○		○			○				○	○	○	○
気滞			○		○		○						○	○	○
気虚							○	○	○	○					
血虚	○	○													
水滞					○			○			○		○		

更年期障害に最もよく使われる漢方製剤は当帰芍薬散、加味逍遙散、桂枝茯苓丸の3種であるが、これらを含め、保険薬価基準に収載されているエキス製剤の中から、更年期障害の治療に頻用されている10種を取り上げ、それぞれの使用目標を以下に示す。

1. 当帰芍薬散

虚証体質で、瘀血、血虚、水滯の状態のもの、すなわちやせ型で、色白、つやがなく水っぽい弛緩した皮膚をしたものに用いる。腹力は弱く、胃部には振水音を認める。温性の駆瘀血剤（当帰、川芎）、補血剤（当帰、芍薬）、駆水剤（茯苓）が組合されている。訴えとしては疲労感、無気力、冷え症、めまい、耳鳴り、肩こり、頭痛、頭重感、動悸、不眠などの不定愁訴が多い。

2. 加味逍遙散

主剤として鎮静作用のある柴胡、芍薬で構成される。虚証体質で、瘀血、血虚に加え、「肝気のうつ滞」からくる精神不安、いらいら感、発作性の熱感（hot flash）、発汗を訴えるものに有効である。他覚所見としては、胸脇苦悶、すなわち季肋下が緊張し、抵抗、圧痛のあるものに用いる。

3. 四物湯

冷え症を主体とする虚証の人の聖薬ともいわれ、当帰、川芎、芍薬の駆瘀血、血行促進作用をもつ生薬からなる。これらを配合する当帰芍薬散と異なり、皮膚は乾燥、カサカサしているもの、腹力は中等度のものに用い、胃部に振水音を認めるものには用いない。

4. 温経湯

比較的体力の低下した虚証の人で、手掌のほてり、口唇の乾燥、下腹部の冷え、痛みを示し、腹力は中等度のものに用いる。

5. 女神散

虚実間でのぼせ、ほてり、冷え、不眠、動悸、不安、腰痛など気滯、血虚の症状を訴え、比較的愁訴が固定しているものに用いる。

6. 桂枝茯苓丸

実証体質で、典型的な瘀血の所見である両側臍傍の圧痛、抵抗を認め、のぼせ、頭痛、肩こりなどの気逆、動悸、めまいなどの水滯を示すものに用いる。駆瘀血剤の芍薬、牡丹皮、桃仁、駆水剤の茯苓、「気・血」のめぐりをよくする桂皮の五つの生薬からなる。

7. 桃核承気湯

実証で強い瘀血所見を認め、腹診で左下腹部に圧痛、抵抗があり、便秘傾向を示すもの（小腹急結）に用いる。主剤は緩下作用や血管拡張作用を有する桃仁、大黄、桂皮である。症状としてのぼせ、頭痛、肩こり、めまい、冷え、腹満、腰痛を訴える。

8. 柴胡加竜骨牡蛎湯

虚実間以上で、神経質、いらいら感、不眠、のぼせ、抑うつ傾向などの精神神経症状の強いもの、胸脇苦悶と臍上に大動脈拍動の亢進を認めるものに用いる。小柴胡湯に竜骨、牡蛎、茯苓、桂皮などの鎮静薬を配合したもの。

9. 大黄牡丹皮湯

実証で瘀血所見を認め、腹診で下腹部（主に右側）に圧痛、抵抗があり、便秘傾向を示すものに用いる。駆瘀血剤である桃仁、牡丹皮、瀉下作用を有する大黄を配合する。

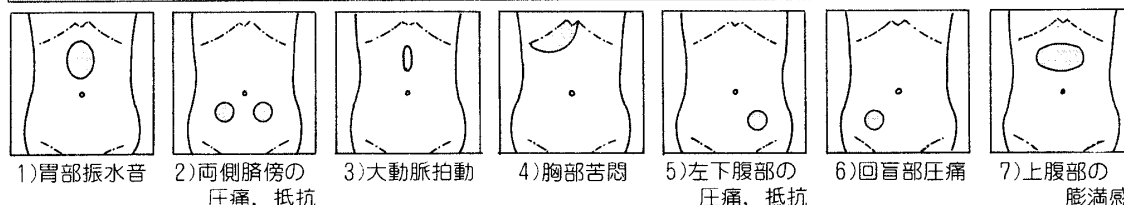
10. 黄連解毒湯

実証でめまい、動悸、のぼせ、いらいら感、不眠など自律神経症状や精神神経症状に対して鎮静剂的に使用される。黄連は鎮静、鎮痙作用を有する。腹力は中等度以上で、胃部に膨満感を認めるものに用いる。

以上にあげた10種の漢方製剤に対応する病態および腹証を表2に、更年期障害の症状を表3に示す。

(表2) 各種漢方製剤と対応する病態および腹証

No.	漢方製剤	虚実	漢方上の病態					腹力	腹証
			瘀血	気逆	気滯	血虚	水滯		
23	当帰芍薬散	虚	○			○	○	弱	1)胃部振水音 2)両側臍傍の圧痛, 抵抗
24	加味逍遙散		○	○	○	○		弱～中	4)胸脇苦悶 2)両側臍傍の圧痛, 抵抗
71	四物湯					○		中	3)大動脈拍動
106	温経湯		○			○		中	2)両側臍傍の圧痛, 抵抗
67	女神散	中	○	○	○		○	中～強	2)両側臍傍の圧痛, 抵抗
25	桂枝茯苓丸	実	○					中	5)左下腹部の圧痛, 抵抗
61	桃核承気湯		○	○				中～強	5)左下腹部の圧痛, 抵抗
12	柴胡加竜骨牡蛎湯			○	○			強	4)胸脇苦悶 3)大動脈拍動
33	大黃牡丹皮湯		○					中～強	6)回盲部圧痛
15	黄連解毒湯		○					中～強	7)上腹部の膨満感



(表3) 更年期障害の症状と漢方製剤

No.	漢方製剤	虚実	更年期障害の症状												
			のぼせ	発汗	冷え症	ほてり	動悸	めまい	肩こり	腰痛	疲労感	いろいろ	不眠	ゆううつ	頭痛
23	当帰芍薬散	虚			◎		○	○	○	○	○		○		○
24	加味逍遙散		◎	◎	○	○	◎	○	○	○	○	◎	◎	◎	◎
71	四物湯		○		○						○	○			
106	温経湯				○	○	○		○		○	○	○	○	○
67	女神散	中	○	○		○	○			○		○	○	○	○
25	桂枝茯苓丸	実	◎	◎		○	○	○	◎	◎	○	○	○		○
61	桃核承気湯		◎	◎	○		○	○	○	◎	○	○	○	○	○
12	柴胡加竜骨牡蛎湯		○	◎			◎	○	○		○	◎	◎	◎	○
33	大黃牡丹皮湯		○		○					○					
15	黄連解毒湯		○			○	○	○				◎	○	○	○

当てはまる症状 ○ よく当てはまる症状 ◎

おわりに

漢方療法は個人の体質を考慮に入れた全身治療法という面では西洋薬療法を補う以上のものがあるといえる。また細かく診察し、証を得ようとする医師の努力が患者の信頼を得る利点もある。患者の訴え（愁訴）の組合せから漢方薬を選択してもかなりの有効率が得られるが、更年期障害のようにその多様な症状が時期によって変化する疾患に対しては、可能な限り「証」をとらえたうえで、漢方薬を選択することが治療効果を上げるうえで望ましい。今後漢方薬の現代医学的な作用機序の解明、証の客観化、定量化、科学的な薬効評価の面での進展が期待される。